

□ひとり歩きのための  
ヨーロッパの美術館

〈2〉

# 巨人ピカソ 追跡作戦〈中〉

伊藤 誠

△神戸新聞社事業部第一部長△

去る一月三十一日の夜、南フランスで起きたピカソ作品の盗難事件は、私には非常に大きなショックであった。盗まれた点数が油絵一一九点という史上最大の数であることもさりながら、事件の現場がアビニヨンの法王宮殿特設美術館だったからである。実は、この美術館へは昨年十一月初めて訪れ、ここに並ぶ作品群に触れて、改めてまたピカソの偉大さを確認したばかりだったのだ。ピカソの油絵二〇一点、版画・デッサン類二〇〇点弱、陶器約二〇〇点の陳列作品を有し、世界各地で開かれたピカソ展のポスター六〇余種をも併陳するこの美術館は、恐らく世界に幾つかあるピカソ美術館の中でも作品数の面ではスペイン・バルセロナの美術館に匹敵するすばらしいものである。(目下二月八日現在、犯人がつかまつたというニュースは入っていない)

ところで、現在人口が十万にも満たない小都市アビニヨンの美術館、それも特設美術館に、総計六〇〇点にも上るピカソ作品がどうして所蔵されていたのだらう、と不思議に思われる方があるかも知れない。そもそもアビニヨンと聞くと、まず思い出すのは「輪になって踊る



「アビニヨンの娘たち」

う」という歌で知られたアビニヨンの橋、そして十四世紀の約七十年間、ローマの権威を無視して七代にわたるフランス人法王が居住した法王宮殿、といったところだろう。町の周囲を未だに城壁が取り巻いていてどこからかといえば中世ムードで訴える観光都市といつてよさそうである。そのような意図からであろう、戦後この町では「アビニヨン芸術祭」を毎年主催して、音楽、演劇等で人々の関心を呼ぶことに成功した。そして、その芸術祭の内容をさらに盛り上げるため、無人となっていた法王宮殿の旧礼拝堂内部を特設美術館に改装し、ピカソに提供したのである。

法王宮殿のような所に自作を列べることは、かねがねピカソにとっても夢だったようだ。それが実現することになった。時に一九七〇年。会期は五月一日から十月一日まで。出品は一九六九年から七〇年にかけての新作でまだ彼のアトリエに置かれてあった油絵一六七点とデッサン四十四点であった。そして、その後彼は一九七三年四月八日、九十一歳の高齢で亡くなったのだが、同年アビニヨンで第二回展を開く予定であった彼の意志を尊重し七〇年以後の油絵二〇一点で以って作品展が開かれたの



右から「自画像」「科学」恩寵  
「妹ローラ」「街端」「病める母  
子」

である。今度の会期は五月二十三日から九月三十日までとなっていたが実はその作品群が現在まで陳列されてあつたわけだ。というのも、作品展開催後、遺族間で遺産相続問題が起り、会期終了後も作品返却先がややこしくなってしまうて、裁判で決着がつくまで展示しておこうということになったからだ、と聞いた。

法王宮殿は堂々たる建て物だった。ローマ・パチカンほどの豪壮さはないけれども、宮殿よりも城塞といったきびしい構えに、これを造った当時の「ローマ何するものぞ」という覇気のようなものがうかがえた。その建て物の端っこに小さな入り口があり、そこから特設美術館への通路になっている。中へ入ると地下道のような感じで、どうやら昔は抜け道だったもよう。そこを通り抜け階段を二階分

ぐらい上ると旧礼拝堂の入り口前へ出る。礼拝堂の中へ一歩足を踏み入れて驚いた。都会の学校の運動場ぐらいは十分にありそうな広々とした空間の、周囲の壁面にびっしりと、しかも二段掛け、三段掛けをくふうして、きれいにピカソの大作が飾られているの

である。礼拝堂だけに天井は高いし、間仕切りめいたものは何もなく、会場全体が見渡せて、まことに壮観。しばらくは動けず、立ち止まったまま四方へ目をやるだけ。人影もわずか数人しか見えず、いわば物音一つしないような静かな場内で、私の内部には次第にボリュームを上げるものすごい竜巻き音のようなものが聞こえ始めたことだった。

常に美術界の先頭に立ち、従っていつも毀誉褒貶のただ中にいた感のあるピカソだけに、ピークを越えたといわれて最晩年の作品には特に風当たりがきつかったようだが、荒々しい筆致の中に息づくこの会場の二〇一点、約三〇〇人の男女像を見ていると、彼ら、彼女らが発散する潜在エネルギーは、まさに独り我が道を行く巨人の生命力の投影そのものだと思えてきた。しかもこの中には、ピカソ自身が迫り来る寿命を自覚して筆をとった「死の自画像」の一連の作品が含まれているといわれる。礼拝堂は形骸と化していても、まさにこは人の魂の洗われる場所であった。

そこで盗みが行なわれた。何たること！ 当然のことながら、当分は閉鎖であろう。しかも、残りの作品も大事をとって撤去、分散ということすら考えられる。すばらしい人類の文化遺産を、全くくだらぬことで人々の目から遠去けてしまう絵画泥棒の罪は、まことに大きいといわねばならない。

さて、アビニオンと言え、ピカソに関してはもう一つ忘れてならぬつながりがある。記念すべき作品「アビニオンの娘たち」に、その名が冠せられていることだ。ただし、この作品の方のアビニオンはスペイン北西部の大都市バルセロナの市内にある街の名である。

バルセロナはピカソにとって、非常に大きな意味を持つ都市であった。そして、現に同市モンカダ通りにはピカソ美術館があつて、ピカソ愛好家には必見の美術館になっている。車の入らない小路の中ほどに入り口がある

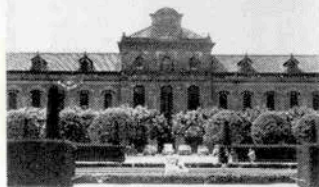
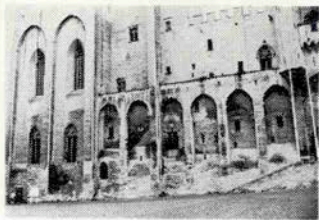


ので、何となく小さな美術館だと思いがちだが、そのコレクションの内容はすばらしい。もともと、少年時代からの親友で、後に私設秘書となり伝記作者ともなったサルテスが、一九六〇年に彼の持っているピカソ作品全部を、美術館を造ることを条件にバルセロナ市へ寄贈したのがきっかけで、従ってバルセロナ時代の作品が多いが、後にコレクションもふえ、特にサルテス死去を悼んでピカソ自身「宮廷の侍女たち」の連作全部を寄贈したことが大きい。開館は一九六三年三月。

バルセロナは、いわば画家ピカソの基礎造りをした街だ。彼は一八八一年、南スペイン・マラガに生まれたが十四歳のとき父の仕事の関係で移って来た。それから二十三歳でパリに定住するようになるまで約十年間をここで送り、画家として生きる目標を定めることになった。それではここでどんな生活をし、どんな絵を描いていたか、ピカソ美術館の所蔵作品を中心にたどってみよう。

「自画像」は十五歳の時の作。少年らしいいういしさを表情に残しているが、もうしっかりした仕上げだ。彼はこの前年、受験資格の二十歳には大分間があるにもかかわらず、異例のこととして、父が教師として勤務する美術学校の物体素描および絵画の上級コースを受験、みごと合格している。なお、このピカソ美術館には、彼が九歳の時に描いたという素描から收藏されているが、どれも少年が描いたとは思えぬほどすばらしい出来。

「科学と恩寵」は、十六歳の時の大作である。二年前に亡くなった妹をしのぐための作画ということで、父ともう一人の妹もモデルになった。ただし、下絵では非常に

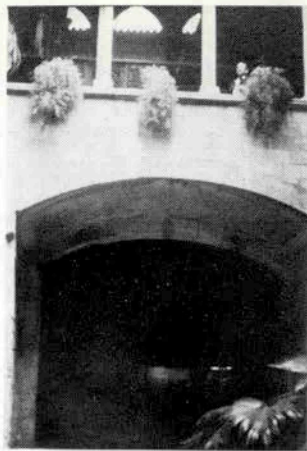


上アピニヨンの法王宮殿、右下の入口が特設美術館への通路。下バルセロナ近代美術館

愛情にあふれたこしらえだったのが、自らモデルになるほど力を入れてくれた父の指導のため、上品だが冷めたくなり、破綻のない構成ながら個性味の薄い仕上がりになったと言われている。しかし、それだけに官学的画法としては完璧であり、マドリッド美術展に出品すると賞を受け、画家として名前を認められることになった。わずかに十六歳である。父も親戚の人たちも非常に期待をかけるようになり、彼はこの年の秋、サン・フェルナンド王立アカデミーの上級コースに通うため単身マドリッドへ移された。が、学校の講義は面白くなく、ブラード美術館へ通って模写をしたり、街の人々を写生したりして日を送るが、やがて病気になる。翌年、友人のいなかで療養しながら、農民の生活や風景のスケッチをし、生まれて初めて自分で働いて生きる生活を体験。いわば人間的に生まれ変わった。作画に関しても、自分の道を行く決意をする。

「妹ローラ」は十九歳の時の作品。単なる写生を越えて、描かれた人間の生活環境から、その性格までがにじみ出てくるような仕上げ。この年前記サルテスと出会っている。バルセロナにカフェ「四匹のネコ」が出来、若い芸術家のたまりとなつて、ピカソも当時の画家や知識人と知り合う機会を得た。翌年是一九〇〇年という世紀の変わり目。世界の美術の中心地パリへ約二カ月の旅をする。やはり画家として燃えるものがあつたのだらう。

「街娼」はパリから帰って来た翌年、二十歳の時の作品。大都会の底辺に生活する人たちに焦点を当てての制作だが、ロートレックの影響などが見られる。しかし、貧しい人々、しいたげられた人々への関心はつり、この秋ごろからいよいよ「青の時代」が始まるのである。そして「病める母子」はその「青の時代」の作品の一つ。二十三歳。この年ピカソはバルセロナを離れ、じつくりと腰を据えるべくパリへ乗り込んだのである。彼自らも貧乏ではあったが、内にはすさまじい闘志があつた。かくて、前回紹介した「洗濯船」の青春時代へ突入



バルセロナのピカソ美術館

していくわけだ。

以上、十代半ばから二十代初めまでの五点をたどっただけでも、ピカソが並み並みならぬ技倆の所有者であったことが、「応理解いただけのらう。『青の時代』と『赤の時代』を持っているだけでも、ピカソは世界の美術史に残ったと言われている。しかし、今振り返ってピカソが二十世紀最高の画家として認められるのは「アビニヨンの娘たち」を皮切りとして開拓した「立体派」により、本当の意味の「現代絵画」を樹立したからである。

さてそれでは、その問題の「アビニヨンの娘たち」の写真を見ていこう。この作品は現在、ニューヨークの近代美術館に所蔵されており、パリでの「洗濯船展」にも現寸大の複製画しか陳列されず、ちよつと残念だったのだが、五人の女性を題材とした何とも異様な画面である。完成は一九〇七年、二十六歳の時。前年に見たイペリア彫刻や、この年に見たアフリカ彫刻からの刺激をこめながら、従来なかった新しい造形世界を成就したのである。まことに勇敢な前進であり、絵画の解放を意図したすばらしい革命であった。なぜなら、これ以後、絵画は何をどのような方法で作ってもいい自由を獲得することが出来たのだから。

そこでアビニヨンという街だが、ここはバルセロナの赤線地帯である。港街特有の解放地区を自らの革命的作品のモチーフとしたピカソの意図はどの辺にあったのだろうか、と一夜そのアビニヨンを歩いてみた。もちろん

ん、一夜の散策ぐらいで世紀の巨匠の制作意図を慮るなど僭越もはなはだしいことは重々承知のうえ。ただ実際にこの足で歩いてみたかったのである。そこはすごい熱気に満ちた街であり、通りであった。男と女がまるで渦を巻いている感じ。幅三、四米の道路をはさんで、飲み屋やゲーム店などが軒を連ねているのだが、そんな構えは申し訳けだけのようで、店内も街路同様通り抜け自由。それが延々と続く。タバコの煙がたちこめ、白、黒とりまぜてものすごい数の女性たちが、たずんたり、イスに腰かけたり、タバコをくわえたり、グラスを手にしたり。そして内も外も祭りの人ごみのようにごった返している。ざわめきもちろんすごい。どこもかしこも、生の男と女の息使いが満ち満ちていて、淡白な日本人にはいささか強烈すぎるのではないかと思われるふんい気。ここでは気取りや飾りは全く通用しない。生命の燃焼があらさまに提示されている感じだ。あの作品を描いた時のピカソの気持ちは、単に異色の裸婦群像を創るといったことではなく、アビニヨン街にみなぎるひたむきなエネルギーを取り込んで、既成のものにない新しい創造へとつなぐ起爆剤に転化し、昇華したかったのではないだろうか。世の鼻つまみになりかねぬことなど十分わかったうえで、内から突き上げてくるものを率直に表現した結果、あのように出来がったのだらう。すごい人だ。

バルセロナの近代美術館には「四匹のネコ」時代の仲間、ピカソと影響し合ったカサヘマス、ルシニョル、ネルらの作品があるはず。夏と冬の二度、私はこの街を訪れ、近代美術館をもたずねたが、二度とも閉館中だった。二度目は、一部分で陳列取り替え中らしく人が動いているのを見つけ、走り見でいいからと館員に断わって館内を突っ走ったが、残念ながらピカソの仲間の作品を壁面に確認することは出来なかった。ピカソの陰に隠れてしまったとはいえ、ある時代の若いエネルギーの持つすばらしさを、そこでも見てみたかったのだが。



□連載小説／3▽

# 播州路

福元 早夫 え・山本 文彦



バス待合所から国鉄西脇駅前をながめると、タクシ  
がとまっているのが見えた。傘をさしてその方にむかい  
ながら、ぼくは、冬子のいる場所を、電話できいておか

なかった自分のうかつさに、いまごろになってやっと気  
づいていた。

駅前から遠いのか、それともすぐ近くなのか、かいも

く見当がつかなかった。だから、タクシーに頼る方が近道だ、と考えた。雨はさほど強くはなかったが、それでもこやみなく降りつづけていた。

「播州織布の工場までいってほしいんですが、かましませんか……」

とぼくは運転手にいった。相手は読んでいた漫画本を傍へおきながら、なにもいわず、ただかるくうなづいた。タクシーは商店街をぬけて川沿いに走った。川の流れをさかのぼって、のろのろとはしった。そして、しばらくいくと、橋をわたった。杉原川とかかれていた。

「この川はどこへ流れているんですか」

ぼくは運転手にきいた。

西脇の街ははじめてだった。だから、ここが、どの辺に位置するのか、ちよつとわからない。ただ、杉原川の流れは、瀬戸内海にむかっているのはたしかだった。

「加古川につながってるんですわ」

と運転手がいった。

「ああ、そうですか」

といって大袈裟にうなづきながら、なぜかしらぼくは、奇妙なところの安らぎをおぼえた。加古川へつながっている、ときいて、この市と神戸との距離感が、いっぺんに消えてしまったような気持になったせいかもしれないかった。

橋をわたってしばらくいくと、運転手はタクシーをとめた。周囲はちよつとした工場地帯といった感じだった。ひと目みて、繊維関係のそれだ、ということがわかる。

「この辺ですか」

とぼくはきいた。

「ええ」

と相手はこたえた。

「この右手の工場が、そうです」

「どうもすみませんでした」

といって、ぼくは料金を支払った。

駅前から五分とかかっていなかった。こんなに近いの

だったら、なにもタクシーにのることはなかったわけだ。

播州織布工場の事務所と思われるその入口の扉の前に事務服姿の若い女がたっていた。一瞬、冬子かな、とかんがえた。だけど、そうでないことに、すぐに思いあたった。冬子は事務の仕事ではなく、現場の女工なのだった。

ちかづいていくと、女はこちらにかかるく会釈した。同じように会釈しながら、遠慮がちにぼくはいった。

「さきほど電話しました、大迫冬子の親戚のものです、冬子がいっつもお世話になりました……」

「いいえ、こちらこそ」

と相手ははにかんだ。

ぼくは右手に持っている紙袋を、こころもち前につきだしながら

「渡したいものがあるのですが、ちよつと、面会させていただけませんか」

と頼んだ。

「ええ、よろしいですよ」

と女はいい、どうぞ、といいながら、ぼくを事務所の中へ招き入れた。おじやまします、と小声でいいながら、ぼくは女のあとにつづいた。

奥のほうに、工場の経営者らしい五〇がらみの男が机にむかっている。その大きな机をはさんで、こちら側にもう一人の男が横顔をみせている。二人は仕事のことでは何か語り合っている、といったふうだ。顔つきが深刻そうだった。

「呼んできますから、ここで待っていてください」

と女はいつて、椅子をすすめた。

「忙しいのに、おまけに仕事中に呼びだしたりしてすみませんねえ」

と、ぼくは奥の方にかかるく会釈しながら、女にいった。

「いいえ、いいんですよ」

と女がいった。それから事務所をとびだして、隣接した工場のほうへと、小雨の中を走っていった。

ぼくはすすめられた椅子にはすわらず、じつと突っ立っていた。二人の男は、はじめからこちらには目もくれず、経営の話に余念がない、といったところだ。ぼくはどうも居心地がわるく、身のおきどころにこまった。

しばらくすると、女事務員がえってきた。そして、息をはずませながら

「大迫さん、すぐに来ますから」

といった。

「すみません」

と、ぼくはちいさくいって、頭をさげた。

女事務員は机にむかって、仕事にとりかかった。ぼくはまがもてず、たばこをさがそうとした。とそのとき、ガラス張りの扉のむこう側に、だれかやってくる気配がした。

冬子だった。彼女はそぼふる雨の中を、青い傘をさしてこちらにやってくる、事務所の入口で傘を折りたたんだ。ふゆこ、とぼくはこころの中でさげんだ。

冬子はこちらを見て、兄ちゃん、と遠慮がちにいい、奥の方に一礼してちかづいてきた。いがいと元氣そうだった。だけど、身体つきは以前よりさらに、ほっそりとなっているようだった。

「連絡せんと、急にきてごめんな」

と、ぼくはいった。冬子はしろくほんのりと化粧をしていて、女らしくなっていた。

「ええんよ、気にせんでも」

と、白い歯をみせて彼女がいった。

「これ」

と、ぼくは紙袋をもちあげた。

「郷里から送ってきたんや。母ちゃんからや。ふゆこに、いうて」

「わざわざごめんね」

と彼女はいい

「寮の、うちの部屋にいこうか」

といった。事務所の中だと気をつかう、といったいい

かだった。ぼくだって同じ気持だった。それに、せっかく来たのだから、冬子の部屋も、仕事場も見ておきたかった。

「かまへんのか」

とぼくは訊いた。

「かまへんの」

と彼女がいった。どうやら、ぼくがここへやってくる間に、冬子は面会の時間をもらっていたようだった。

「ちょっと、冬子をおかりします」

と、ぼくは奥の方にむかっていい、それからぼくたちはならんで一礼してから外へむかった。

「ちいさい工場やろう」

と冬子がいって。傘をもちあげてぼくは工場をながめた。屋根の低い、ただ一棟だけが、長屋ふうのびていた。ちいさな町工場といったところだ。鉄をつくる工場にくらべるなど、とうていできなかった。

「うちの現場をしてみるね」

と冬子がいって。そして彼女は、先になってその方へとすすんだ。

工場の扉をあけて、その騒音のすさまじさに、まずぼくはとびあがった。何がこんなにまで騒ぐのか、と目を見張りながら奥へとすすんでいった。

中へはいったすぐのところに、ギヤーやカップリングや、大小さまざまなモーターなどが、棚にたかくつまれていた。どうやら、工場の機械類の、予備品置場らしかった。

冬子はその方には目もくれず、つかつかと先へすすんだ。ぼくは、うひゃあーと、こころの中でさげんで、思わず足をとめた。

棚につまれたそれらの予備品類は、どれもこれも、締ぼこりを深くかぶっていて、それが、雪にうもれているように見えたのだ。いやむしろ、寒さのきびしい雪原で、樹氷をみているようだった。

「ふゆこ」





とぼくは叫んだ。だけど、声がとどかない。なにしろ  
すさまじい騒音なのだ。ふゆこ、ともういちど呼びとめ  
ながら、ぼくは彼女を追いかけた。

「ここが、うちの現場なんよ」

と、冬子がいったようだった。

「ええっ」

と、ぼくは膝をおって、耳をそばだてた。

「うちは、ここで、働いているんよ」

と、耳元で冬子が叫んだ。

やっ、と、ききとれた。そうか、といったふうに、大  
きくうなづきながら、ぼくは、昼に夜に、二交替ではた  
らいているという、冬子の仕事をみつめた。

機がずらっと列んでいる。横に二〇台ばかりあり、縦  
に何列ばかりあるのか、ぱっと目には数えきれない。と  
にかく、夥しい機の数だった。

機のこちら側に、巻かれた白い糸が何本かたててあり、  
それが機械的に織られていて、目の前で白い反物に仕  
上っていく。

原理そのものは、経糸の奇数、偶数の糸を交互にあや  
つり、そこに緯糸を通していく、という、むかしなが  
ら、手織りの方法とかわらないみたいだった。

「ここで、おまえはどんなことをするんや」

とぼくはいった。

「ええっ」

と、冬子が背伸びしてきた。話にならない。

「耳栓はあれへんのか」

と、耳に指をつっこんでぼく。

「ええっ」

と、また彼女。とにかくうるさい。いちどに何百台か  
の機がうごいているのだから、騒々しいのは当然だとし  
ても、話をしようにも声がききとりにくい。それに、耳  
にふたをして仕事をしないと、神経のほうがいってし  
まうにちがいない。これだと、鉄橋の下で、列車の走り  
つづける音をきいているようなものだ。

「行こうか」

といって、ぼくは出口のほうに顎をしゃくった。うん、  
と冬子がうなづいた。手まね物まねの方が、より通じや  
すいわけだ。

工場をでて、寮にむかった。雨足は強くはないけれど、  
いぜん、降りつづけている。冬子は青い傘にかくれて先  
に歩いた。

彼女の後を、雨水でぬかった道をさけて歩きながら、



ぼくは胸がつまってきた、ちよつとばかり涙がうるんだ。冬子は、あまりにも瘦せすぎていた。おまけに、背も高くない。上着にまっ白い仕事服を着ているから、病人みたいだ。

中学を卒業してはじめて工場へやってきたとき、さぞ、辛かったにちがいない。手紙の中で、死にたい、と思うことがある、とぼくに泣いた。だのにぼくは、辛抱すること、ぐつと奥歯をかみしめて、じつと堪えること、としかいつてやれなかった。現在までずっとだ。

さっき、工場の中で、冬子はぼくの前で仕事をしてみせた。織られていく糸の張り具合をたしかめただけだったけれど、いかにも、ペテランといったところだった。だけど、冬子は、工場に似つかわしくはなかった。あまりにも、ひよわすぎた。ぼくは目をしばたいて、咳払いをした。そうやって、ふいにおそってきた感傷をはらいのけながら、冬子のあとにつづいた。

工場と寮は、目と鼻の間だった。五〇メートルと、離れていないにちがいない。

「きれいなところやんか」

と、ぼくはいった。工場と似たりよつたりの、うす汚い、長屋みたいなところだろう、と思っていたのだ。

「そやけど……」

と、冬子がいった。

「なんとなくアパートみたいな造りやろう、うち、あんまり好きやないねん」

「なんでや、新築のりっぱな寮やのに」

「前のほうがよかった。長屋みたいで、きれいじゃなかったけど、広々としてって気持ちがよかったんよ」

なるほど、とぼくは思った。

近代的なつくりの、寮らしい寮よりも、古びた家らしい家のほうが、居心地がよかった、と冬子はいう。その居心地のよさとは、もしかすると、故郷のイメージだったのではあるまいか、とぼくはかんがえた。故郷の、我が家で寝起きしているような、そんな気持ちをいだかせた

のかもしれない。

玄関をあけて中へはいっていった。冬子がいうように、ちよつとアパートみたいな感じをあたえた。階段をのぼって、彼女は二階へいった。紙袋をさげて、ぼくものぼっていった。若い娘さんたちのいる寮にしては、いがいと静かだった。二交替制だから、仕事を終えて休息しているひとが、何人かはいるはずだった。二階へあがって、廊下をすこしばかり歩くと、そこが冬子の部屋だった。彼女は錠をあけて、どうぞ、といって先にはいった。

「ここに、一人ですんでいるんか」

と、部屋の内部を見まわしながらぼくはいった。女のおいがした。六畳間の中央に電気コタツが置かれていて、そのうえに、ポットとならんでコーヒーや紅茶のセットがおかれている。部屋内はきれいに整頓されていた。女のおいがしたけれど、それは、まだ未成年な、いかなれば、女学生のような、うすい香りだった。壁のあちこちに、男か女かわからない、ヤングシンガーの写真がはつてある。部屋中に、子供っぽさがただよっている。

「そう、ここに一人でいるんよ」

と、冬子は、みかんをこちらにさしだしながらいった。

「のんきでええやんか」

「だけどここは、ただ、眠るだけの部屋やもん。仕事で、身も心もぐつたりして……」

彼女は、眉間にすこしばかりシワをよせた。それからポットをもってたちあがった。

「食堂へいって、お湯をもらってくる。兄ちゃん、コーヒーがええ、紅茶がええ」

冬子はそういつてから、ふいに

「さっきね、事務所のひとがね……」

と、ちいさく笑いながらつづけた。

「伯父さんにしては、えらい若い人やなあ。兄さんか、恋人か、思った、やて」

ぼくは、胸が、どきつ、とした。

## talk and talk



〈神戸っ子愛読者サロン〉

★いつも送本を楽しみにしていますが、最近発行がおくれるのか月の半ばに届きます。待ち遠しい感じ……。

内容の豊富なすばらしい月刊誌美しい色彩も他にみられない素敵です。本当に毎月楽しみにしていただいております。

有難うございました。

宝塚市清荒神 ▲小関泰子V

★花屋さんの店頭の花がかわいいです。神戸っ子二月号ありがとうございました。

★神戸の特質は国際性。荒尾先生がいわれている「センター街とか元町とかはまあよろしいが、古い文化をみんな壊してしまうのが目立ちます。」日本中の人々が反省しなければいけないと思います。ありがとうございました。

宝塚市野上 ▲丸本明子V

★いつも「神戸っ子」を楽しみにしています。結婚のため神戸を離れ東京に来て、早一年になります。神戸を離れる時は、あのおいしいショートケーキも、こうばしいバケツも、お厚い神戸肉のステーキも食べられなくなってしまうと本当に悲しくて、そして何よりもあの北野町の家並みや夕闇の神戸港（彼）へ行ったのです。に漂うコーベの香りから遠ざかってしまふことが、とつてもとつても

残念で、それですごく素敵に見えた彼が急に「コンチクシーのニクキヤカラ」に見え「神戸を取るべきか、彼を取るべきか」と深く悩んだものですね。

それから、毎月送られて来る「神戸っ子」はどんな小さな神戸のカオリも見逃さないようにと、目を皿のように、鼻の穴を煙突のように、耳を「王様の耳はロバの耳」のようにして「スミ」からスミまで楽しんでます。

彼にいつも「神戸っ子」が悪いなんて言われてばかりですが、もう半年で生まれて来るベビーも、絶対神戸っ子に育てようという張り切っています。

どうかこれからも楽しい企画で神戸を離れて淋しがっている神戸っ子達にもすてきなカオリを届けさせて下さいね。

東京都杉並区 ▲長須摩耶子V  
☆今や東京にも神戸の味が沢山行ってます。神戸のファッションも東京で大ハヤリです。東京にいても神戸のカオリは結構感ずることができているのではないですか。それでも充分でないところを「神戸っ子」がお届けしたいと思います。ところで、あなたは名前からして神戸の香りがあふれてますね。

▲編集部V  
★今朝、いつものようにカーテンを引くと、窓一面に見る富士山の色がほんの少し春の色に変わっているのに気づきました。

神戸の山並みはどんなでしょうか？

私が初めて神戸を訪れたのは昨年の十一月。中学時代の友達を訪ねて行ったのですが、彼女に案内してもらった晩秋の六甲や神戸港は、小さい頃から育った私には本当に「エキゾチック神戸」に他ならず一ぺんに神戸ファンになってしまいました。

そして帰郷際「いつまでも忘れないでね」ということばといっしょに手渡された一冊の本。あれから毎月送られてくる小さな本のべ

ージをめくるたびに、すっかり神戸の生活が板についた彼女のことやなだらかに続く坂道を思い出して、一人感慨にふけっています。

また、機会があれば何度でも訪れたいと思っていますが、それまでに「KOBECO」を読んで、充分に神戸の研究をしておかなくては……。

今度、訪れた時も神戸はやさしく迎えてくれるかしら？

▲藤原美知子V  
☆春の富士はきれいでしょうね。神戸の街も春の色でドンドン明るくなってきました。六甲の緑も海の青さも太陽の光を浴びてキラキラしています。是非近いうちに神戸に遊びにきて下さい。

▲編集部V  
★神戸の皆さん元気？  
ここは遠い遠い極寒の地なのだから。水の世界なのだ。十六日より「Hedwig」にきています。

船は砕氷船でバリバリバリバリバリと進むのであります。

ヘルシンキにはハンブルグから二日間も船に乗ってやって来たのであります。ヘルシンキに着く三時間前からは一面、氷なのです。船が進むにしたがって「びびが入っていくのです。氷の割れる音が聞こえますか？

着いた日は零下25度。僕は「死ぬ／＼死な／＼」と言って30分も外は歩けません。あくまでも零下25度。海の上を歩いたのです。

「I walked on the sea」なのだ。海は一面の水で、ここまでも氷なのだ。今日は、ヘルシンキに来て一週間目。天気は良く海の面上を神まで歩いたのです。そのもとと神を船がいったあと氷の上がゆれて……音が少ししびびりくりして岸の方へ走ったのですが大丈夫。もとと神にも人が散歩しているのですぞ。

▲ヘルシンキにて植松奎二V  
☆奎ちゃんちゃんのいない神戸もすっかり春めいて来たけど、やっぱり淋しいな。 ▲編集部V

## KOBE POST

★画家の小林益喜氏の個展が、3月4日19日まで、大阪阪神百貨店で開かれます。大阪は、淀川ベリ風景画を、神戸は異人館の懐かしい風景を、小松タチで披露されます。

★邦舞の林啓二さんは、一月は東京で長谷川一夫主演の東宝歌舞伎に、二、三月は、島倉千代子さんと東京のコマ劇場張りきって出演中です。

★県立夢野台高校の当津隆生先生の「お便り」は、夢野台高校創立50周年の記念行事を終えて、文部省からのヨーロッパ各国歴訪と続き、また今年は、兵庫県生物学会創立30周年で、記念総会、台湾研修旅行、公開記念講演会、記念出版など、地域社会と生物学を結びつけるための番頭役をつとめます。重ねてご支援をとのことです。

★JAPAN KOBE ZEROの模忠さんが二月一日神戸市立須磨結婚式場で、溝井俊江さんと結婚、タヒチで甘いアマイハナムリンを楽しみました。

★本誌に「女体百景」を執筆中のH・ジャンコと細川薫氏（評論家）は、朝日テレビ制作の「おはようワイド土曜の朝に」へ八時半からレギュラーとして出演中。有名夫人婦をゲストにその「女体百景」を聞いて料理しながら、一般読者論に発展させようという企画。

目下発売中の「日・センス入門」（青春出版社）にひきつづき、今年には「小説・女子大学」（二見書房）を刊行されます。乞う期待。

★サロン神戸時代（田辺区中山一丁目三八/モンシヤートコブキビル1F番四二一三五六七）の神戸時代ギャラリーでは、2月12「3月」をテーマに美佐展が開かれ、一龍をテーマに小品や装いの書が展示されています。







# 神戸のうまいもん&ドリンキング

## ★日本料理

讃岐名代うどん **あこや亭**  
神戸市灘区旗塚通7-5 TEL 231-6300  
トアロード店 TEL 391-2538  
兵庫駅前店 TEL 575-5306

和食 **くれなゐ**  
三宮生田新道浜側中央  
KCBビル2F TEL 331-0494

かつぱう **吉本**  
神戸市生田区加納町3丁目95-1  
(ニュージャパン別館前) TEL 241-3450

鍋もの・おむすび **悟味西**  
お茶漬・かばた  
神戸市生田区北長狭通1の20 TEL 331-3848  
三宮さんちかタウン TEL 391-5319

お茶漬・おむすび **る**  
鍋もの  
神戸市生田区北長狭通2の1  
TEL 331-5535

なこ焼 **たちばな**  
三宮センター街(旧柳筋) TEL 331-0572

北海道郷土料理 **蝦夷**  
神戸市生田区中山手通1丁目115  
生田区東門筋東門会館ビル1階  
TEL 331-7770

カニ料理 **婆娑羅(ばさら)**  
神戸市生田区北長狭通1丁目18  
三宮阪急西口北側レインボープラザ2F  
TEL 321-6363

Objets D'art **Seto** **瀬戸**  
美術喫茶  
神戸市生田区山本通3丁目27の9  
瀬戸ビル1F TEL 221-6548

## ★西洋料理

レストラン **アポロン**  
ディーバーラウ  
神戸市灘区八幡通5丁目6 TEL 251-3231

レストラン **鹿鹿皮(あらかわ)**  
神戸市生田区中山手2-9 TEL 221-8547・231-3315

GALLERY & STEAK HOUSE **SAN-MON 三門**  
神戸市生田区中山手通2丁目98/99 TEL 331-5817

ステーキハウス **れんが亭**  
神戸市生田区下山手通2丁目34 TEL 331-7168

レストラン **セントジョージ**  
神戸市生田区北野町1丁目130 TEL 242-1234

レストラン **男爵**  
神戸市生田区中山手1-18  
山手第一ビル1F TEL 241-0778

maison de la mode **花屋敷**  
三宮フラワーロード市役所前 TEL 251-2109

鉄板グリル **きゃんどう**  
神戸市生田区北長狭通2-22 TEL 331-1183

レストラン **フィッシャー・マンズ・ポート**  
神戸港第4突堤ポートターミナル  
TEL 331-0301

居酒屋 **ロス・ヒターノス**  
フラメンコショー  
生田区下山手通3丁目22  
下山手セントラルハイツ  
TEL 391-5431

レストラン **ムーンライト**  
三宮・生田新道 TEL 331-9554  
TEL 331-2509

グリル・鉄板焼 **月六**  
BARBECUE & STEAK  
生田区元町通3丁目  
TEL 331-2108

レストラン **スイス・シャレー**  
神戸市生田区北野町3丁目48アール・ド・マントン1F  
TEL 221-4343

フランス料理 **ビストロ・ドゥリオン**  
神戸市生田区山本通2丁目40-1  
TEL 221-2727

ピッツアハウス **ピノッキオ**  
神戸市生田区中山手2-101  
TEL 331-3545

レストラン **フック東店**  
神戸市生田区栄町1-5-3 TEL 321-3207

ビザ&スバゲティ **ガルの店**  
灘区琴緒町5丁目1-7 西山ビル1F TEL 241-9025

ステーキハウス **グリン青山**  
神戸市生田区中山手通2丁目112-2(トアロード) TEL 391-4858

レストラン **フック神戸店**  
神戸市生田区栄町通2丁目24 TEL 321-3453

レストラン **元町フルーツホール**  
元町1番街 TEL 331-1987

ビザ・パブ **ピザ・パテオ**  
神戸市生田区元町通1丁目49(元町1番街)  
TEL 331-9378

ナイス・レストラン **火の鳥**  
神戸市生田区中山手通1丁目27  
TEL 242-1330

スカンディナヴィア料理 **ゴックスタッド**  
ト世界の民族音楽の店  
生田区山本通3丁目18 回教寺院前  
TEL 242-0131

メキシコ小料理亭 **ティファーナ**  
神戸市生田区中山手通1丁目4ノ12 パールコーポラスビル1F  
TEL 242-0043

ステーキ&ドリンキング **黒牛**  
神戸市生田区中山手通2丁目39の36  
TEL 241-3739

ドイツ風音楽レストラン **コーベ・ローレライ**  
生田区北長狭通6丁目39  
TEL 371-0086

ステーキ&ドリンキング **神戸館**  
神戸市生田区下山手通2丁目29の3  
アマツビル1F TEL 321-2955

★喫茶 **にしむら珈琲店**  
宮・ホー  
中山手店・神戸市生田区中山手通1丁目70  
TEL 221-1872・231-9524  
センター街店・神戸市生田区三宮町2丁目35  
TEL 391-0669

北野店・山本通2丁目9 TEL 242-2467  
(会館側) 3F事務所 TEL 242-1880

喫茶 **ガーデニア**  
神戸市生田区東町113-1 大神ビル1F TEL 321-5114  
TEL 221-1872・231-9524  
センター街店・神戸市生田区三宮町2丁目35  
TEL 391-0669

珈琲 **モーツアルト**  
神戸市生田区山本通2丁目98 グランドマンション1F  
TEL 241-3961

ティー&スナック **エポック**  
神戸市生田区元町通3丁目(浜側) TEL 331-3694

コーヒースポット **メディタレーニアン**  
神戸市生田区北長狭通3丁目(トアロード)アーバンビルB1  
TEL 331-2050

★club **千**  
クラブ  
神戸市生田区下山手通2丁目21 TEL 391-1077

club **飛鳥**  
神戸市生田区中山手通1丁目117 TEL 331-7627

club **小万**  
神戸市生田区東門筋中島ビル3F  
TEL 391-0638・4386

club **さ**  
神戸市生田区中山手通2丁目75  
TEL 331-7120

club **なぎさ**  
神戸市生田区北長狭通2の1 TEL 331-8626

くらぶ **ぶーげん**  
三宮生田新道浜側中央KCBビル5F  
TEL 331-8593

club **Moon Light**  
BAR TEL 331-0886・391-2696  
Club TEL 331-0157

クラブ **るふらん**  
神戸市生田区北長狭通1丁目53 TEL 331-2854

★STAND & SNACK **スカール・レット北野**  
お好み鉄板スナック  
神戸市生田区北野町2 北野アーバンライフ1F TEL 242-0076

ドリンク & レストラン **ベルビュ・ドール**  
神戸市生田区中山手通2丁目101 大洋ビル2F  
TEL 321 5677

スタンド **かてな**  
生田区中山手通1丁目90 英健ビル1F  
TEL 331-1316

洋酒ハウス **雑貨屋**  
生田区下山手通2丁目8の6  
(生田新道相対タワシ横上る) TEL 321-0260

スタンド **グラムール**  
生田新道ビル地階 TEL 331-4637

スナック&ドリンク **姫**  
神戸市生田区中山手通1丁目18 TEL 221-1950

カクテルラウンジ **サヴォイ**  
高架山側 テキの店北 TEL 331-2615

DRINKING IS AN ART OF LIFE **ウッドハウス**  
神戸市生田区下山手通1丁目32 PHONE 078-241-7320

スナック **ビジービー**  
神戸市生田区中山手2丁目 TEL 391-4582

居酒屋 **ポルドー**  
生田新道浜側中央KCBビルB1F TEL 331-3575

Wine and something **珍地理屋**  
神戸市生田区中山手通1丁目24-7  
大和ナイトプラザ1F TEL 242-0288

サロ **神代**  
生田区中山手通1丁目28  
モンシャウトコトブキビル TEL 242-3567

ナイトイン **おしゃれ貴族**  
神戸市生田区中山手通1丁目24-7  
大和ナイトプラザB1 TEL 242-1925

スタンド **くる実**  
生田区中山手通1の72 TEL 331-6985

**キャンティ**  
本店洋酒の店 神戸市生田区北長狭通2ノ3  
tel 391-3060・391-3010

北店スー&パシの店 神戸市生田区下山手通3ノ8/9  
tel 331-3661

DRINK **スネカジリッ子**  
SNACK 神戸市生田区下山手通2丁目  
水見ビルB1 TEL 391-8708

music spot **サン・ノーレ**  
トアロード店 生田区下山手通2丁目トア・ロード  
tel 391-3822

北野店 生田区中山手通1丁目24-7  
ダイワナイトプラザ6F tel 221-3886

素舌洞 **でっさん**  
神戸市生田区北長狭通1丁目258  
TEL 331-6778

STAND **マシユケナダ**  
生田区下山手通2丁目ちやいなタウン地下  
TEL 331-5587

スナック **GASTRO**  
神戸市生田区中山手通3-20  
トア・マンション TEL 231-0723

ティー&パブハウス **バス・チャーリントン**  
生田区北長狭通2丁目(トアロード) TEL 332-1125

純会員制 **エドワーズ倶楽部**  
神戸市生田区北長狭通1丁目28  
ホワイトローズビル5・6F 生田新道 TEL 391-3300

サロン **アルパトロス**  
生田区中山手通1丁目24の7  
大和ナイトプラザ2F・BTEL (231)3300

CAFE WHISKY **音楽の家・ETエトワTOI**  
神戸市生田区三宮町3丁目 三宮センター街西入口  
スカイトアビル3F TEL 332-1755

スナック **山荘**  
神戸市生田区北長狭通1丁目22 TEL 391-5823

ティ&カクテルラウンジ **ルカカルトン**  
生田区北野町3丁目2-67 TEL 241-4323

スナック **興志務楽亭**  
神戸市生田区山本通2丁目60パールライフB1  
TEL 242-1977

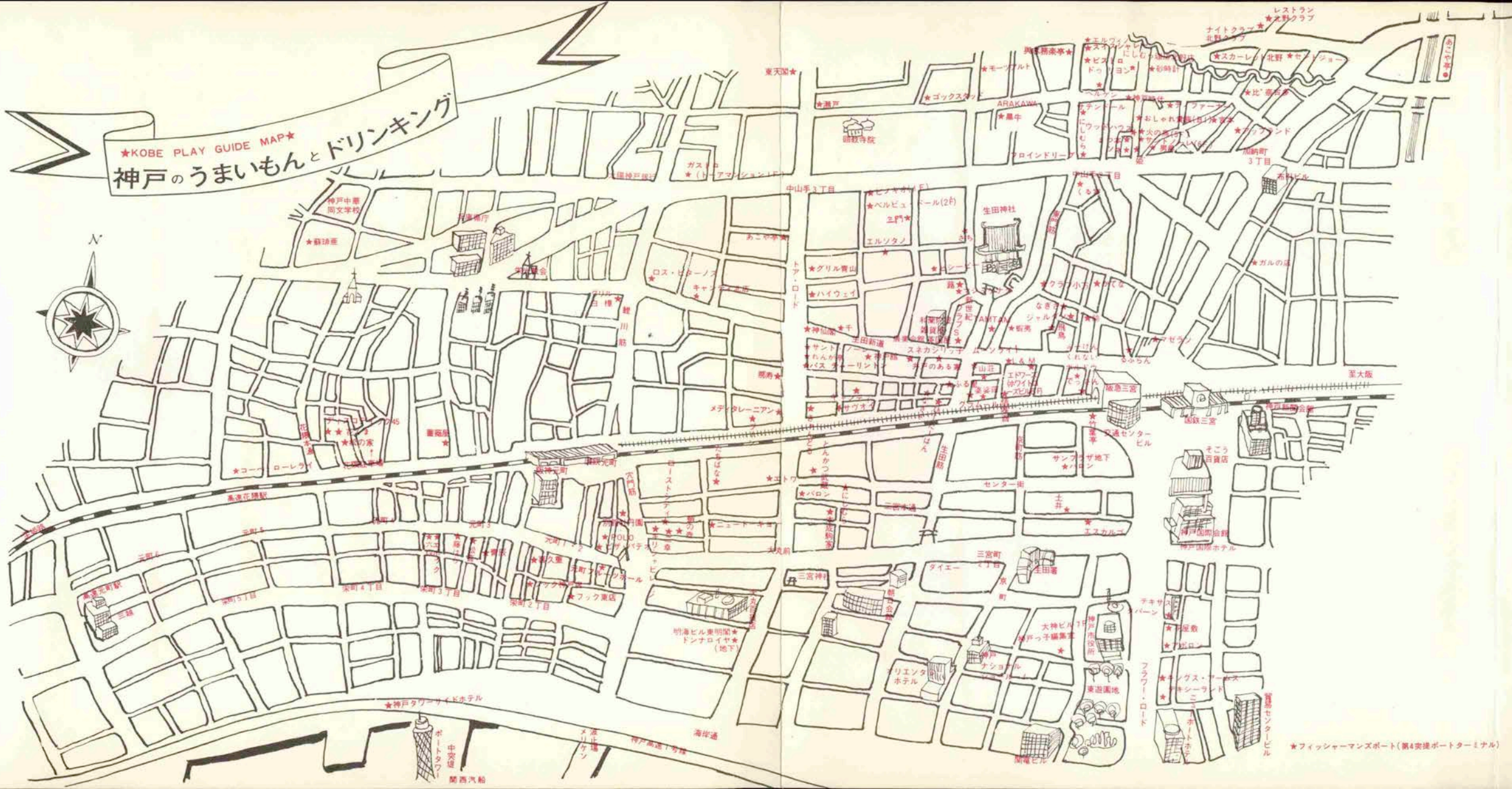
SNACK **L&M**  
生田区北長狭通1丁目25 生田新道ビルB1 TEL 321-3070

パブ&レストラン **アップランド**  
神戸市生田区加納町3丁目1-34 TEL 241-8271



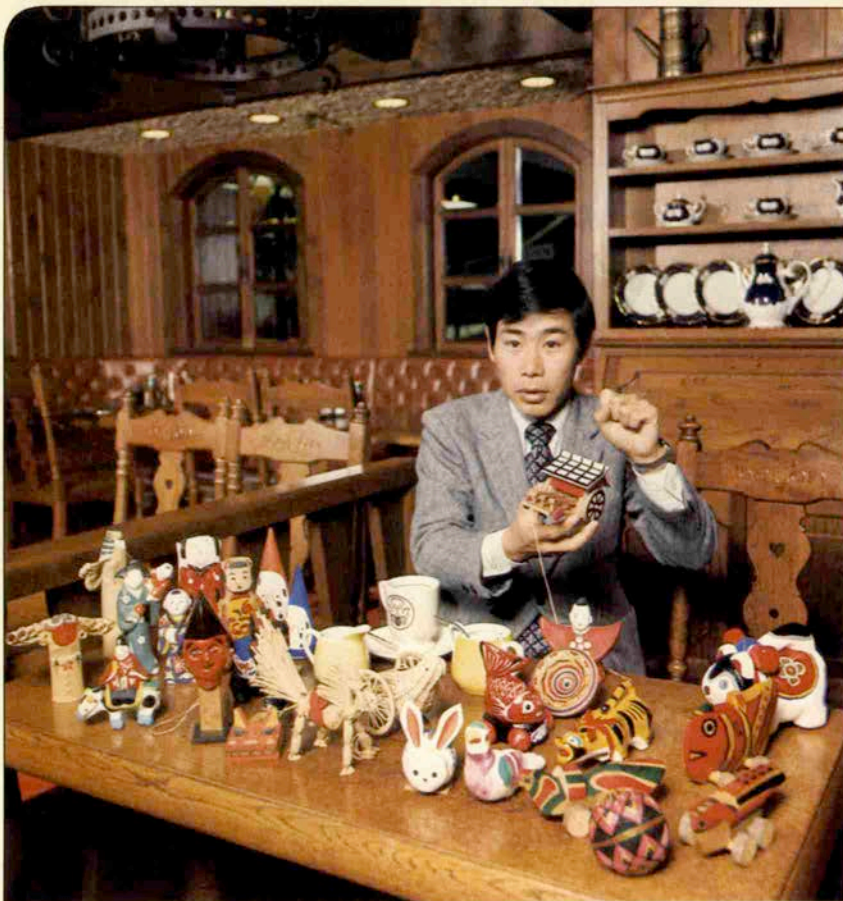
★KOBÉ PLAY GUIDE MAP★

神戸のうまいもん＆ドリンキング



★フィッシャーマンズポート(第4突堤ポートターミナル)





# baLon antique series

## 〈37〉郷土玩具

井上 重義さん

〈井上郷土玩具館館主・日本民俗学会会員〉

「このごろ少しずつ郷土玩具がブームになっています。我々にとっては嬉しいことです」と語る。全国の郷土玩具が約五千点も。「10年以上も集めていると自然にこれぐらいの数になってしまいますよ」

神崎郡香寺町の自宅兼玩具館に展示されているがそこも手狭になり、現在拡張工事中。3月にはオープンし、一般に公開される。見ているだけで楽しくなる。一度足を運んでみてはいかが？

さんプラザ店にて  
カメラ / 米田定蔵



# ハロシ

★英国風喫茶・レストラン 三宮さんプラザ店  
TEL 391-1758 AM11:00-PM9:00迄

★コーヒーショップ トア・ロード店  
TEL 391-1210 AM10:00-PM9:00迄

★コーヒーショップ センター街店  
TEL 391-1375 AM10:00-PM9:00迄





30名様までのパーティーの予約を承っております  
ぜひご利用下さい

神戸市生田区中山手通1丁目前川ビル1F

TEL 391-3335

5:00P.M.~1:00A.M. 日曜定休







スナック

**MIWA**

美和

生田区下山手通 1

☎ 391-3050

P.M.6~A.M.1 日祝休

三月弥生ともなれば花の季節。カウンターの花びんになにげなく飾られた花にあなたの心はなごみ、そしてママをはじめとして、美人の花たちにあなたのお酒は一段と楽しくなってくる。

グディファアーナ「メンバー紹介第四弾」今回はヒデちゃん。当店の最年少ノモちゃん？ 独身。お客様の料理の相談役デス。料理のことなら何でもお気軽にお尋ね下さい。リズムはギロ担当。



メキシコ料理の店

**TIJUANA**

生田区中山手通 1

☎ 242-0043

平日PM6~AM2 日祝PM6~AM12無休

**Night  
in  
KOBE**



プレイハウス

**スペイン広場**

生田区北長狭通2生田筋金剛山西入る

☎ 391-0375 (1F) ・ 391-3443 (2F)

PM6~AM2 無休

「スペイン広場」では、毎週金・土曜日にフラメンコショー（7時より5ステージ）を行っています。リナとサリータの踊りに、吉川哲夫のギターがあなたにスペインの夜をお届けします。

今夜も「サテンドール」では宮原透ピアノトリオ（B・渡辺健蔵 Ds・内藤博）の演奏に外人客や女性客が愉快地スイングしています。あなたもどうぞ。ポトル G & G・五千円カティサーク・六千五百円



ジャズの店

**SATIN DOLL**

生田区中山手通 1

☎ 242-0100

PM6~AM4 無休



あなたの前の  
一枚の扉——

扉を開けると  
そこは  
いつもの  
顔見知りの面々が  
グラスを傾け、歌い、  
陽気にやっている店

CHIKUSEN

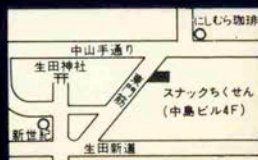
スナック

ちくせん

ちくせんミュージックタイム  
神戸のター坊の演歌熱唱  
平田正明のピアノ弾き語り

生田区中山手通 1丁目114-1  
☎331-3131

近藤正美・岩本文夫



## Night in March



STAND

# 苑

えん

神戸市生田区加納町4丁目1  
(東海銀行裏)  
☎321-2247

気どらない家庭的な雰囲気、ホッと一息つけるのがうれしい。つき出しもこっていて、おでん、鍋焼うどんなどもある。ロバート  
ブラウン / キープ7,000 / 水割700 PM 5~AM12 日・祭日休み



# ぼるて

神戸市生田区中山手通1丁目115  
☎391-5470

カウンターの他にテーブル席もある。こじんまりとした落ち着いた雰囲気、きさくなママ。常連なればこそわかる魅力がある。ロバート  
ブラウン / キープ8,000 / 水割700 PM 6~AM12 日・祭日休み



# こはく

神戸市生田区中山手通1-105-9  
ミナトビル3F  
☎331-7870

ママは、親子二代目なので、古くからの常連が多い。ビジネスマンが主体だが、いつも和やかでほのぼのとした暖かきがある。ロバート  
ブラウン / キープ7,000 / 水割500 PM 5:30~AM12 日・祭日休み



# くらぶ小松

神戸市生田区中山手通1丁目72  
東門ヴィレッジB1  
☎331-3468

ママはいないが、アットホームなムードがいい。マスターは歌がうまい仲々の芸達者ということだ。麒麟党の店でもある。ロバート  
ブラウン / キープ10,000 / 水割800 PM 6~AM12 日・祭日休み





PUB & RESTAURANT

UPLANDS

生田区加納町3丁目

1-34

☎241-8271



DRINKING IS AN ART OF LIFE

WOODHOUSE

生田区中山手通1丁目32

山内ビル

☎241-7320・7983

KOBE DRINKING GUIDE

或る頁

生田区中山手通1丁目

91-3

☎332-1020



英国パブ  
ミスタージャック

生田区北長狭通1丁目

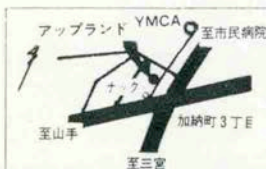
44-2 大山ビル2F

☎332-2128



★エキゾチック・コウベの香りが漂うパブ&レストラン“アップランド”もスッカリ神戸っ子にはおなじみになりました。外国人客がカウンターで煙草をくゆらせていたり、若いカップルが楽しそうに何やら話していたり、初めて行ってすぐに気に入ること間違いなしのお店です。毎週土曜は、夜8時から12時までピアノの難波らの演奏とチャーリーのギターとボーカルを30分毎にやっています。他の日は、月・水・金とチャーリー、火・木と難波がステキなライブをきかせています。もちろん腕自慢のゴックさんの料理の数々もお気に召すでしょう。

★ローストビーフ¥2,700 シェパーズパイ¥850 スターキ&キドニパイ¥800 コーニッシュパースティ(ミートパイ)¥600 フィッシュ&チップス¥600 J&B、OLD各¥400 ビール¥400  
平日11:00A.M.~3:00A.M. 祭日6:00P.M.~3:00A.M.  
日曜6:00P.M.~0:00A.M. 無休



アップランド



或る頁

たそがれに、甘い寂しさと人恋しさを胸に或る頁を聞く.....  
或る頁には.....サガンのアンニュイ(倦怠感)が.....  
夜の愛好者が求めるひとつの顔.....  
熱いリエゾン(関係)とロマネスクな友情.....  
血のちぎりに代るアルコールのちぎりに.....  
また或る頁は.....  
夜のふかさと感傷に抱きしめられて  
にぎやかな友とほのかな酔いに  
洒落れた会話をなймаせて  
アンニュイという名の酒をのむ  
小さな部屋.....

馬田 佐知子

(日曜・祭日も営業しています)

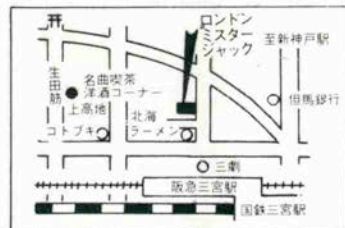
★あと1ヵ月とせまったチャーリーのリサイタル。  
4月10日(土)午後6時より神戸国際会館大ホールにおいて当“ウッドハウス”で歌っているチャーリーが、ロック、ブルース、バラードと彼のすべてを発表するリサイタルを聞きます。前評判も上々、神戸でちよつとしたセンセーションをまきおこしております。ぜひ見に来て下さい。きつと満足していただけること受け合いです。  
なお、ウッドハウスでは今年1月よりキープボトルをしました。ニッカG&Gとスコッチです。ぜひ1本ボトルしてください。くわしくはウッドハウスでお聞きください。

★ビール(小)¥400 水割(OLD)フィズ各¥500 おつまみ¥150  
スバゲティ・ピラフ各¥500  
平日5:00P.M.~2:00A.M. 日曜5:00P.M.~0:00A.M.  
第1・第3月曜休み

ウッドハウス



ミスタージャック



★三劇山側の大山ビルに、いかにも神戸らしいオシャレな店があります。  
2階が本格派のための英国パブ“ミスタージャック”。イギリスのパブ造りの名門ジョンロジャース社が腕によりをかけて設計から施工までを担当、スペースをぜいたくにとり、ピアノ演奏の流れる豪華なムードは最高です。また、3階は英国スタイルのブティックパブ“ロンドン”。ファッションブルな神戸っ子にピッタリのステキなパブです。  
★〈ミスタージャック〉ボトルノジン¥2,500 サントリー〈角〉¥3,000  
〈オールド〉¥4,000 〈リザーブ〉¥5,500 〈V.S.O.P.〉¥6,000 ス  
コッチ〈ハイグ〉¥6,000 紅茶、コーヒー各¥300 グレープジュ  
ース¥400 アイスクリュー¥350  
5:00P.M.~2:00A.M.  
〈ロンドン〉ボトル価格は同じ。ビール¥350 〈角〉¥300 〈オールド〉  
¥350 ジン¥350 おつまみ¥300~  
5:00P.M.~1:00A.M.